

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」4月号 (通巻第11号)
2008年3月28日発行
[発行人] 赤塚祐一郎
[編集人] 大森美知子
[発行所] 株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

4

April Edition
2008, vol.11
Free of charge

この人の声が聴きたい◎4月

岩見隆夫さん (政治評論家)

己を語らず、 現場をして語らしむる。



最近の若者は新聞をあまり読まなくなったと聞く。たしかに、私の周囲にも新聞をとっていない若者が多い。彼らの多くは、インターネットから情報を取得している。私たちの世代(いわゆる団塊)にとっては、新聞はほとんど唯一の信頼できる情報ソースであった。もちろんテレビや、週刊誌というものがなかったわけではないが、新聞には他の媒体にない威厳と、信頼感があった。オピニオンがないとか、海外の新聞に比べて、どの新聞の紙面も似たり寄ったりだという批判はあるが、私は日本の新聞は、総じてよくやってきたと思う。しかし、その新聞が最近とみに精彩を欠いている。インターネットの出現により、新聞はもはやニュース伝達の速効性において、先陣から遠く隔たる存在でしなくなってきた。紙面を彩る事件や事故は、すでにインターネットで報ぜられ、テレビの実況でコメントを加えられたもので、新聞はもはや旧聞に属する。いきおい、独自の見解といったところに力点を移して媒体としての独自性を打ち出すか、テレビが報じない裏話を穿り出すかといった奇策に頼る。

最近の若者は新聞をあまり読まなくなったと聞く。たしかに、私の周囲にも新聞をとっていない若者が多い。彼らの多くは、インターネットから情報を取得している。私たちの世代(いわゆる団塊)にとっては、新聞はほとんど唯一の信頼できる情報ソースであった。もちろんテレビや、週刊誌というものがなかったわけではないが、新聞には他の媒体にない威厳と、信頼感があった。オピニオンがないとか、海外の新聞に比べて、どの新聞の紙面も似たり寄ったりだという批判はあるが、私は日本の新聞は、総じてよくやってきたと思う。しかし、その新聞が最近とみに精彩を欠いている。インターネットの出現により、新聞はもはやニュース伝達の速効性において、先陣から遠く隔たる存在でしなくなってきた。紙面を彩る事件や事故は、すでにインターネットで報ぜられ、テレビの実況でコメントを加えられたもので、新聞はもはや旧聞に属する。いきおい、独自の見解といったところに力点を移して媒体としての独自性を打ち出すか、テレビが報じない裏話を穿り出すかといった奇策に頼る。

私は数ヶ月前に読み続けていた新聞を止めて毎日新聞を購読することにした。いくつかの理由があるが、他紙が発行部数を確保するに汲々として新聞本来の紙面づくりを忘れていくように見えるのに対して、発行部数競争に乗り遅れた毎日新聞には、どこか初心のジャーナリスト精神が生き残っているように思

えたのである。「現場百遍」は事件捜査の基本だが、それはジャーナリストの基本でもある。自分の足で現場を踏み、自分の耳で聞き自分の目で確かめる。ジャーナリストにとってはそれだけが真実なのであり、それ以外の権威や俗情と結託しないのが誇りであるはずである。独立不羈。ところが、往々にしてジャーナリスト(あるいは大新聞の社名)の誇りが残って(それを驕りという)、真相へ喰らいつく記者魂のほろがながしるにされている。あるいは上層部の意向を慮って、あらかじめ記事に自制を加えるへたれサラリーマンのような根性。あるいは自らが正義とばかりに、机上の正論を書き続ける鈍感。どこかに本物のジャーナリストは生き残っていないか。

さて、右記の文章を私は一人のジャーナリストの顔を思い浮かべながら綴ってきた。そのジャーナリストとは、毎日新聞のサツ回りの記者からスタートして、最近の政治コラム執筆まで半世紀に亘って第一線で活躍してきた岩見隆夫である。たとえば、日本の歴代宰相を語らせて、彼ほどリアリティのある言葉で語れるジャーナリストはそうはいない。それは、彼が一個の個人として直接かれらに接し、問いただしてきた真実の断片だけを、信じてきたからである。「己を語らず、己の見聞したものの精度によって読者に訴える」名コラム『近聞遠見』を読んでいるとこんな岩見の声が聞こえる。

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個人的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてがで試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一的」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さん、江戸文化研究の田中優子さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百七十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

第12回 ラジオデイズ落語会

【日時】4月5日④午後2時半開演（午後2時開場）
【場所】コア石響（四ツ谷駅徒歩7分）

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんをお願いします。

三遊亭歌武蔵

(さんゆうてい・こむさし)

三遊亭圓歌門下。平成十年、真打昇進。力士から噺家になったという珍しい経歴の持ち主。大きい体ながらも、雄々しい武士からかわいらしい娘まで登場人物を自在に操る。特にお菊の血のお菊の登場シーンは抱腹絶倒。寄席や落語会以外に老人ホームや刑務所への激励訪問も精力的に行っている。



柳家喬太郎

(やなぎや・たけだろ)

柳家さん喬門下。平成十二年、真打昇進。師匠・さん喬譲りの表現力と、たくい稀な創作力で「母恋いくらげ」など質の高い新作落語を創作する一方で、三遊亭圓朝の「熱海土産温泉利書」といった古い噺を現代に掘り起こし演じきる。古典落語と新作落語、双方を夢幻自在に操る八面六臂の人気者。



●お囃子

松本優子 (まつもと・ゆうこ)

柳家わさび

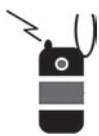
(やなぎや・わさび)



柳家さん生門下。平成二十年、わさびの名で二ツ目昇進。師匠の名から業味繋がりで粋な名前に。3月の二ツ目昇進披露興行から解禁になったマクラも楽しみのひとつ。音楽家の両親譲りの表現力も手伝ってか前座時代から心に残る高座姿との声も多く、今後目の離せない存在。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑩



柳亭こみち

燕路には男の子がいる。今春高校生になる彼は私の入門時、小学4年生。「愛ちゃん(こみちのこと)道灌やって！ 聞いてあげる」と言われて演ると、転げて笑う。「いいんだけど、あそこをこうすればもっといいよ」とコメント。落語が大好きだ。

彼が小学6年生のとき、子供会で落語をやると言いだした。自分で台本をこさえた「饅頭怖い」を師匠に披露。微笑ましく見る私の横で、師匠の顔が曇りだす。「それは落語じゃない」と一蹴。「落語は本当に素晴らしいものだ。お前が適当に話をしたら、聞いている人が落語をつまらないものだと思うだろう。落語の神様に失礼だ。」

子供の遊びに真剣になる師匠には驚いたが、その日から毎日血のにじむような稽古が始まった。演目は身

の丈に合ったものを、と「手遅れ医者」の小咄に。次に子供の噺が落語らしくなる。彼が泣いてもできるまで許されない。師匠の熱意と彼の努力の甲斐あって子供会での落語は大成功を納めた。

演者が満足でも聞く側が落語をつまらないと感じたら演じないほうがまし。師匠の落語愛が叶い、聞いた子たちは落語の面白さを知ったことだろう。

伝統芸の魅力を体現した師匠の子供は、誰より演じる難しさと稽古の厳しさ知った様子。絶対に噺家にはならないかもしれない。

●りゅうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、香妻流名取香妻香巻。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第11回

英雄の歌



松井高志

講談では毎度毎度のことなのだが、落語にもたまに、歴史上の人物が実名で登場することがある。こういうのをとりあえず、「実録もの」と呼ぶ。実録とはいかが、この場合、人物像をデフォルメし、必ずしも事実ありのままを伝えなくても構わないという暗黙のルールがある。「実が六分で嘘が四分だからジツロク」というくらいである（講談の前フリによくある、あまり笑えないギャグ）。「ノンフィクション」という名の娯楽には、いつの世もどこかちよつといかがわしい匂いが伴うのである。

実録の主人公といえ、話芸でも時代小説

でも、絶大な人気のトリオがいて、織田がこれ羽柴がつきし天下餅座りしままに食ふは家康

という歌があるくらいで、講談の「太閤記」（大長編である）も、その気になればこの一首に要約できるということになっている。この歌は講談の「難波戦記」や「村越茂助」などの冒頭にしばしば引用される。

話芸では冬場になると活躍する赤穂義士も「武士の亀鑑」として人気がある。身をやつして主君の仇・吉良の屋敷の様子を窺う彼らの苦心を端的に表現する歌に、君がため新割竹売夜蕎麦うり身を惜しまざる義士の働らき

（三代目圓遊の落語「滑稽義士」の冒頭にある）がある。薪割りをするのは三村次郎左衛門、煤払いの竹売りをするのは大高源五、夜蕎麦売りをするのは杉野十平次である。

もう一人、ポピュラーなヒーローといえば水戸光圀。黄門様の歌でたぶんもつとも有名なのが、「見ればただ何の苦もなき水鳥の足に隙なき我が思ひかな」。これに次ぐのが、正二位大納言への昇進を断り、六十一歳でリタイアするときに作ったといわれる、

位山登りて辛き老の坂麓の里ぞ住まかりける
「高きに在るよりは、低きに在る方が気散じで宜いといふ思召し」を表している、と講談「水戸黄門」（松林伯知）にいう。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く！ 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月中旬に落語・講談速記に出てくるあて字・難読語をドリル形式にまとめた新刊「ナンドク【難読漢字自習帳】」(パズリコ)が発売予定。「話芸・きまり文句」辞典サイトは <http://wagendim.cocolog-nifty.com/>

明烏い話

連載第11回



本田久作



東京の寄席ではじめて「ざっかけない」という言葉を聞いた。噺家が枕で「私はざっかけない人間ですから」と言ったのである。その時は大阪から東京に来て間もない頃だったので、まずこの「ざっかけない」という言葉の意味がわからない。前後の文脈から察するに「気取らない」とでもいう意味かとも思われたが、まさかそんなことはあるまい、そんな風に考えるのはこの芸人に対して失礼だと思った。だが、そうではなかったのだ。「ざっかけない」は私が予想した通り「気取らない」という意味だったのである。

それから後も私はたびたび似たような話を東京の芸人の口から聞いた。彼らは自分のことを「性格は実にさっぱりとしている」と言い、「私は真っ直ぐな性分で」と胸を張り、「浅草っ子なので気持ちに裏表がありません」と自慢する。最初、この人たちは何か裏があつてこんなことを言っているのではないかと疑っていたが、実はそうではなく、何の疑問も抱かず自分のことを「ざっかけない人間」と言っているのだ。だが、「私はね、気取ったところがまるでない人間ですよ」と言うのは私からすれば尋常ではない。少なくとも私は恥ずかしくてそんなことは言えない。ところが、東京の一部の人は恥じらうことなく平気

で「私は善人ですよ」と言える心性を持っているらしい。

『長屋の花見』の元ネタは上方の『貧乏花見』である。大まかなところではこの二つの噺は同じだが、違うところが二つある。まず題名、それから花見に行く動機である。大阪では貧乏であることは恥ではない。恥どころかそれはある種のステータスでもある。といって大阪の人間が金銭を軽蔑し、清貧をこととしているからではない。単純に露悪的だけだ。

もしも先に『長屋の花見』という噺があつて、それが大阪に移されていたら、それでもやはり題名は『貧乏花見』に変えられていただろう。大阪人の持つ露悪趣味では『長屋の……』だとやや弱いのだ。

『長屋の花見』では花見に行こうと言いだすのは長屋の大家である。「うちの長屋はよそから貧乏長屋なんぞと言われて、まことに評判が悪い。それで奴らを見返すためにうちでも花見にぐらい行けるてえことを見せてやろうと思うんだ」というのがその理由である。つまりは大家の見栄だ。大家は自分たちが貧乏と目されるのが悔しいのである。『貧乏花見』は長屋の住人が自主的に花見に行く。金持ち連中が花見に行くのを見ていて、しきりに羨ましがっている奴がいる。そこで「それやったら俺らも花見に行こ。花を見るのはただや」「そやけど、こないな汚いナリで」「ナリを見せに行くンやない、花を見に行くンや」「御馳走がない」「普段食うてるもんを花の下で食えばええんや」となる。彼らは自分たちが花見ができる階級ではないことは承知している。それを承知の上で「金持ちが何やねん」という気分であえて花見に行く。「ああ、そうや、俺らは貧乏人じゃ。そのどっこが悪い」である。だから、最後の喧嘩の場面になると

『貧乏花見』では「それやったら、殺してもらお。今日みたいに御馳走食って酒飲めた日に殺してもらえらんやったら、こないな幸せなことはない」という極端な台詞まで出てくるのだ。これは貧乏を肯定しているのではない。ただ居直っているのである。そして人間は居直ると露悪的にならざるを得ないのだ。そういう人間は自分のことを人前で「ざっかけない人間です」とは言わないし、言えないのである。

●ほた・きゅうさく
一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの養育注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「儂の舞式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞) など

私の讃大ばなし 拾巻

柳家小満ん

『手紙無筆』

き 初高座は人形町末広で、お客が居ない処で上げて貰った。喜々として、最後まで喋って下りてきたら「お客は入って来たら、ささと下りて来い」と一喝された。その後、一年半、持ちネタはこれだけで、心細かった。

『たらちね』

武 次に教わったのがこの噺で、同じく、桂小益兄さんからで、現在の桂文楽師匠である。ネタ下ろしは、新宿末広亭で、団体客で埋まっていた。「葱や葱、岩桐葱や葱」と、そこだけがあけた。岩槻の団体客だったのだ。

『真田小僧』

参 懐かしき、三遊亭田之助師匠が、まだ二つ目の、朝三兄さんの頃に、末広亭の二階の茶屋で教えて戴いた。火鉢を挟んでの稽古で、扇子がやがて、火箸に代わり、煙草の吸殻を胸のポケットへ、入れ始めたのには驚いた。

「声」と「語り」を ダウンロード！

今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

内田樹と平川克美の東京ファイティングキッズコンビが多様な論客陣と知的格闘技を繰り広げます。

- 大瀧詠的(大瀧詠)
- 概念化する世界の読み方(養老孟司)
- 果たして文学は何処へ行くのか(高橋源郎)



温もりと味のある声のエッセイ／新鮮な詩の物語り

- 下町―粋と人情のワンダラランド(小沢昭)
- 色街―華やきの記憶を求めて(田中優子)
- 詩人の愛―金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか(烏丸せつこ)／正津勉



鉄っちゃん噺家ふたりの愉快でディープな道中
面白くて物凄、当世落語家の噺がいっぱい

- 小ゑん遊雀の大井
- 三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥三遊亭遊雀、入船亭扇辰、林家彦いち、古今亭菊之丞……etc.



ラジオデイズサイトにようこそ！
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。



ラジオデイズ 若手噺家の会

【会場】コア石響（四ツ谷）『本庁』1500円

【時間】午後2時半開演（午後2時開場）

●第1回 5月17日①

春風亭栄助 立川志ら乃 瀧川鯉橋

柳家わさび

※ご予約申込受付中！ ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―一三三〇より、先着順です。

オリンパスシンクくる寄席

【会場】コア石響（四ツ谷）『本庁』2000円

【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●第12回 5月17日②

入船亭扇辰 古今亭菊之丞 二遊亭楽大

※ご予約申込受付中！ ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―一三三〇より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語り合いを傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

4月1日 渡辺知明（コトバ表現研究所長）

8日 藤本由香里（漫画評論家、明治大学講師）

15日 高橋誠之助（駒松下社会科学振興財団 支配人）

22日 入船亭扇辰（落語家）

29日 浦雅春（ロシア文学者）

弥生の落語会ふたつ

梅花も香る三月、今回は満員盛況だったラジオデイズ落語会（三月一日）。開口一番は、春風亭一朝門下の春風亭一之輔さん。ネタは「雑罫」。続いて橋家文左衛門師匠が高座へ。二日酔いと言いつつもネタはきつちり「道灌」。前座ネタながら、上手い人がやると上質な古典落語になるのだと再認識させられる。お次は若手真打ナンバーワン柳家三三師匠でネタは「長屋の花見」。先代小さんの芸を思い出し、桜はまだかいな。貧乏長屋の貧乏花見で笑わせてくれました。仲入り後も三三師匠で、ネタは「宮戸川」。帰りが遅くなり、締め出しを食った若旦那、叔父さんの家へ行くことになると、同じく締め出された隣家の娘が付いてくる。早合点の叔父さん、すっかり恋仲だと勘違い。さて若い二人の運命や如何に？ 初々しい若旦那とおませな娘のやりとりが面白い。トリはもちろん文左衛門師匠。なんと本寸法の「文七元結」。親思いの娘が自ら吉原の大店へ出向き、父親の借金の五十両と身代わりに。父親は改心し必ず働いて返すと啖呵を切った帰り道に、店の金を掏られ橋から身を投げようとする文七を助ける。ワケを聞き葛藤の末、文七に五十両を。文七が店に帰ると、先方に置き忘れていた五十両が届いていた。ここから旦那の対応が見事なのだが、それは聴いてのお楽しみ。おじさん達は揃って涙腺が全開状態。いい映画を見たような感動に心も浄化されました。

一方、オリンパスシンクくる寄席。古今亭寿輔と古今亭錦之輔の師弟対決。今年五月真打

昇進と共に大看板古今亭今輔を襲名する錦之輔さん。「飽食の城」、時は戦国時代、兵糧攻め対策に城をお菓子で造ったらその顛末はどうなるか？という爆笑戦国物。「影武者」の方は、戦国時代の影武者が現代に現れたら？というSF噺。どちらも落語的荒唐無稽さが錦之輔さんの生真面目に惚けた味を醸し出して笑わせてくれました。続いて、派手な着物でお馴染みの寿輔師匠。客を食った大胆不敵な言動で笑わせる。今日は昭和の爆笑王柳家金語楼が有崎勉のペンネームで作った二席を熱演。「釣りの酒」は酒飲みたさに釣り好きの人に取り入る男、酔っぱらうと釣りを忘れて大騒ぎ。酒飲みの意地汚い心情が伝わってきて笑わせる。「ラーメン屋」は新作落語史上燦然と輝く名作で、お婆さん落語で一世風靡した故古今亭今輔が売りにした人情噺。舞台のラーメン屋を営む子供のいない老夫婦のもとへ若者が現れ無銭飲食。交番に突き出せと脅すが、本当の子供のように接して若者を改心させる、涙、涙が止まらず……。あゝ落語ってほんとうに素晴らしいですねえ。（ラジオデイズ寺和尚）

（ラジオデイズ寺和尚）

オリンパスシンクくる寄席の"楽屋口(^ 〇 ^)"

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^ 〇 ^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクくる) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★る公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクくる) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようになりますのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

シンクくる (Sync ★R) とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

甘い香りをふりまく沈丁花、青空に羽ばたくように咲く白木蓮、そして多くの人を魅了する桜。新宿御苑は、次々に花が咲き始め、すっかり春の装いとなりました。

重いコートを脱ぎ、彩り豊かな散策路を抜けての通勤は心地よく、足取りも軽くなります。ラジオデイズも御苑に負けず、文芸、対話、

話芸と「声」の花盛り。ぜひお立ち寄りください。

